か。」と訊いたりするのです。私はサラサラが好きと答えると、「パパはじゃがいもが入ったトロ味があるのが好きだなぁ。」と言うのです。一口も食べられず、鼻からレビンチューブが入っている父の姿には不似合いな会話でした。

７月31日抜糸をした頃までは穏やかな日々が流れていきましたが、私は毎晩家に帰ってから蒲団を被って泣いていました。それほど仲がよかった父娘というわけではないけれど、やはり父が死ぬという現実をなかなか受け入れられなかったのです。

８月３日と４日の土・日、もしかしたら一時退院ができるかもしれないという微かな望みを抱いて、家のリビングルームの中に父の寝室を用意するために姫路に行きました。結局は生きて帰る事はできなかったのですが。

その翌週くらいから父の黄疸が悪化し、８月９日、PTCDを行ないました。その夜より父の容態が悪くなり、当日当直だった私は急遽当直を夫に替わってもらい、病院へ行きました。父は、病気のなせる技か、今まで１人で病気に耐えてきた抑圧が取れたせいか、意識混濁状態でした。自分でレビンチューブを引き抜いたりしてベッドの上で暴れていました。ただ時々、好きだったゴルフのスイングのような手の振り方をしているのが唯一の救いでした。その後はタール便と輸血の繰り返しで、現在では行なわれなくなった新鮮血輸血のために、病院のスタッフの多くの方々が献血して下さり、頭の下がる思いでした。８月11日からは毎日病院に泊まり込みで、８月15日からは勤務も休ませてもらい、一日中父の側にいました。そのままずっと父の意識は戻らず、８月16日努力呼吸をしていた父は19時42分息を引き取りました。その夜のうちに父を姫路へ連れて帰り、寝室として用意していた蒲団に寝かせました。８月17日のお通夜と18日のお葬式には多くの方々に来て頂き感謝の気持ちで一杯です。

私は８月20日から仕事に出て、医師会の手続きも同時にしていたので悲しんでいる暇も無かったのですが、数日後お悔みに来て下さった方の話では、父は１年くらい前に下血して、自分の病気を知っていたようです。父は生前よく「病気で長く寝つきたくない。」と言っていました。父は自分が癌だとわかった時に、入退院を繰り返して長く生きるより、死ぬ直前まで普通の生活をする事を選んだのでしょう。数ヶ月前から少しずつ痩せていたそうですが、人にはダイエット中だと言っていたようです。亡くなる前の月までゴルフに行き、入院するその日まで仕事ができたのは、父の本望だったのかもしれません。私には父のような選択はできませんが、人には各々、自分の生き方があるのでしょう。

父は今でもテレビの横にある写真の中で笑っています。あの世でも下手なゴルフをしているのでしょうか。楽しい毎日を送っている事を祈っています。

男明神・女明神　～揖龍・古代幻想～

東光部　土井眼科　**土　井　治　道**

姫路市・龍野市・太子町にまたがる山塊には、地形図を見る限り名前が無いようである（太市の西・林田川の東・太子町の北・槻坂の南、：龍野クラシックG・Cの南方の山塊）。

この山塊の南西端の龍野市の一部分を笹山と呼び、兵庫県・龍野市・森と緑の公社により「龍野笹山見晴らしの森」という名称の遊歩道が作られている。10分も歩けば楽に上がれる。何と言うこともない低い里山ではある。ここに

三木露風によって「奇岩・・・天工・・・」と歌われた巨岩が二カ所にある（♣）が、太子町のひとは「明神山」とも呼ぶ。この「男明神」「女明神」が何ゆえ奇岩であるのかは、これをヨク観察すれば分かる。この奇妙な造形の岩々は天然であるとも云われているが、「女明神」の上部には人の手が加わっている（◆）と私も思う。

［天工ではなく、オーパーツ（場違いな人工物）でもなく、場所どおりのアートだと・・・］

「男明神」
（西はりまリハビリテーションセンターより）

ここからの揖南地区の眺望は最高にすばらしい！そんなに高い場所でもないにもかかわらず、眼下には、多くの家々、緑の山々。その山を貫き美しいS字カーブを見せて東西に延びる高架道。南北に美しく湾曲して光る林田川の流れ。それだけではない。南方には遥に広がる緑の（網干・揖南三町）の平野、その向こうに広がる瀬戸の海、穏やかに浮かぶ家島の島々。

―――「国原は煙立ち立つ　海原はカモメ立ち立つ」

雄大な大パノラマの中、男明神は（大山神社遺跡があった）男鹿島の方を向き、女明神は西島山頂を向く。男明神が男鹿島を向くのは偶然かもしれない。しかし揖保川町・御津町の山々の稜線の上にチョコッと頭を出した西島の山頂に「女明神」がピタリと向き合っているのはどういうことなのでしょうか？この確率は、360分の１の確率かと思われます。勿論、偶然かもしれませんが、偶然だとすればマスマス不可思議で奇妙なこと、とは思いませんか。ところ

「女明神」（上の写真）の岩上から、網干方面を望む

で、西島には何か、あるのでしょうか・・・？

一方、「播磨国風土記」の揖保郡の広山里（龍野市）と枚方里（太子町）に、両明神との関連性を思わせる「神尾山・佐々山」の記述が見られます。話は次のようである。

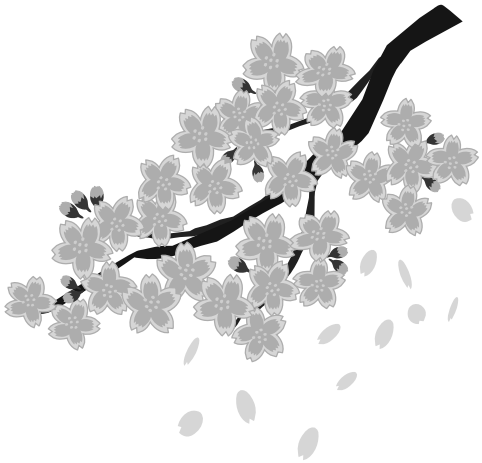
> 応神天皇の御代、出雲の御蔭大神が神尾山にいた。この神は、出雲の国の人でここを通り過ぎる者があると十人のうち五人を留め殺した。そこで出雲の人たちは、サヒ（鋤）を作ってこの岡に祀ったが、男神はこれを受け入れなかった。男神はここに鎮まることが出来ず立ち去った。後からやってきた女神はこれを怨み怒っているのだ。このとき朝廷から遣わされた額田部連久等々（ヌカタベのムラジ　クトト）が神酒を醸すための酒屋を佐々山に作り神を祀った。その後、河内国･茨田郡の枚方里の漢人がこれを敬い祀り、やっと少し御心を鎮めることが出来た。仁徳天皇の御代にこの地、枚方里（太子町）を筑紫の人が開墾した。
>
> （「播磨国風土記」より）

まず、風土記の「男神・女神」と「男明神・女明神」の関係はどうでしょうか？そして、「神尾山の御蔭大神が旅人の半数を留めた」、「男神はここに鎮まることが出来ず立ち去った」、「後からやって来た女神が怒っている」とあるのは、どんなことを暗示しているのでしょうか？。

また、この時、朝廷から遣わされた神を祀る

役職の額田部連久等々が荒れる神々を祈り鎮めたということと、その末裔の額田王（ヌカダノオオキミ）（♥）を随伴した中大兄皇子（天智天皇）が播磨灘から「三山歌」（万葉集－13、14、15）を詠んだということは、全く偶然のことなのでしょうか。何らかの関係があることなのでしょうか・・・？

謎が謎をよぶ古代史。「播磨国風土記」があればこそ。播磨の古代史は興味深く、実に面白い。

参考文献

（♣）「兵庫探検～歴史風土編」（神戸新聞社；1975）
（◆）「古代播磨の地名は語る」（姫路文庫６；1998）
（♥）「万葉のうたひめ」（学童図書）（さ・ら・え書房；昭48）